

(22) 野蛮なキリスト教と老成した仏教（『反キリスト者』の22）

キリスト教が、その最初の地盤である「最下層の階級」を離れ、「野蛮民族」の間に「力」を伸ばしていった時、その前提となったものは、もはや「疲れた人間」ではなく、「内的に野性化され、引き裂かれた人間」であった。彼らは「強い人間」ではあったが「出来損ないの人間」であった。キリスト教は「野蛮人」を支配するために「野蛮な概念や価値」を必要とした。それが「初子の犠牲」や「晩餐における血の飲用」等である。ⁱ

これに対して仏教は「末期の人間(s p ä t e Menschen)」のための宗教であり、あまりに「苦痛」を感じ取る「善良で柔和で過度の精神的種族」のための宗教である。仏教はそうした人々に「平和と快活さ」を、「精神的なものにおける摂食」と「身体における鍛錬」を取り戻させる。キリスト教は「猛獣」を支配しようとするが、その手段は彼らを「病気にすること」である。この「弱化」が「飼い慣らし」と「文明化」のための「キリスト教的処方箋」である。仏教は「文明の終末と倦怠」ための宗教であるが、キリスト教はいまだその「文明」を見出していない。ⁱⁱ

(23) 信仰・希望・愛（『反キリスト者』の23）

仏教は百倍も「冷静で、誠実で、客観的」である。仏教は「罪の解釈」によって「苦悩」や「苦痛感受力」を「礼儀に適ったもの (Anständiges)」にする必要はない。仏教は「考えるところ」をただそのまま言う。「私は苦しい」と。これに対して「野蛮人」にとっては「苦しみ」は「礼儀に適ったもの」ではなく、彼らは自分が「苦しんでいる」ということを認めるためにも、まず「解釈」を必要とする。彼らの「本能」はむしろ「苦悩の否定、静かな我慢」を指示する。ここでは「悪魔」という言葉は「恩恵」である。それは「強力な恐るべき敵」であり、そのような「敵で苦しむこと」は「恥」ではないからである。ⁱⁱⁱ

キリスト教にとって「或るものが真であるかどうか」は問題ではなく、「それが真として信じられる」限りにおいて最高に重要なことである。「真理」と「信仰」とは全く正反対の世界であり、そこに到るには「根本的に異なる道」を行かなければならない。この点について知っていることが「東方」では「賢者」である。バラモンもプラトンもこれについて知っている。「信仰」がとりわけ必要であるということは、「理性」や「認識」や「探究」は「不評」となり、「真理への道」は「禁断の道」となる。そして、そこでは「希望」のみが「生の刺激剤」となる。それはいかなる「現実」によっても反駁されない「彼岸の希望」である。ただし、その「希望」はギリシャ人によって「禍のなかの禍」、「悪意ある禍」と見なされたものであり、パンドラの箱の中に残ったものである。^{iv}

「愛」が可能であるためには「神」は「人格」であらねばならない。「婦女子の熱情」のためには「美しい聖者」が、また「男たちの熱情」に応えるためにはマリアが前景に押し出される。そして、これはアフロディティやアドニス礼拝が前提にあったからである。さらに「純潔要求」は「宗教的本能の激しきや内面性」を強化し、「礼拝」をより「熱心に、熱狂的に、魂のこもった」ものにする。そもそも「愛」とは人間が事物を「ありのままに」見ない状態のことであり、そこでは「幻想的力」が頂点に達する。^v

(24) ユダヤ的・キリスト教的本能 (『反キリスト者』の 24)

キリスト教は、①「ユダヤ的本能(*der jüdische Instinkt*)」への「反対運動」ではなく、その徹底であり、その「恐怖を流し込む論理」へさらに一步を進めた結論である。それが「救世主の定式」においては「救いはユダヤ人から来る」ということである。それから、②キリスト教においてはガリラヤ人の心理学的型がなお認められるが、その「完全な変質」において「人類の救世主」という「型」となったのである。^{vi}

ユダヤ人は世界史上注目すべき民族である。彼らは「存在か非存在か」という問いの前に立たされた時、「完全な不気味な意識」をもって「存在」を選び取った。その代償は、すべての「自然」、「自然性」、「現実性」および「全世界」の「徹底的偽造(*die radikale Fälschung*)」であった。彼らは宗教、礼拝、道徳、歴史をねじ曲げ、「自然的価値に矛盾するもの」にしてしまった。このユダヤ教の複製品、規模は拡大されているが、独創性はない現象がキリスト教会である。この意味においてユダヤ人は世界史上「もっとも宿命的民族」であり、キリスト教徒はその「最後のユダヤ的帰結」である。^{vii}

『道徳の系譜』において、「高貴な道徳」と「怨恨の道徳」という「対立概念」が初めて提出された。「怨恨の道徳」は「高貴な道徳」に対する「否」から発現した。これこそまさに「ユダヤ的キリスト教的道徳」である。「地上」における「生の上昇運動」や「出来の良さ、力、美、自己肯定」一切に対して、「天才となった怨恨の本能」が「別の世界」を捏造しなければならなかった。その世界から見ると「生の肯定」は「悪」あるいは「非難すべきもの」自体に見えた。ユダヤ民族は「もっとも粘り強い生命力の民族」であった。彼らは不可能な条件下に置かれると、自由意志で「自己保存のもっとも深い狡猾さ」から「怨恨の本能」の側につく。「怨恨の本能」に支配されてしまうためではなく、この「本能」のうちに世界に抗する「力」を見るからである。ユダヤ人は「頽廢する者」と「対をなすもの」である。彼らは「頽廢する者」を表出し、「俳優的天才の極致」によって「一切の頽廢運動の先頭」に立つ。それは「生」に「然りを言う者」より強力な何かを作るためである。このように「僧侶的あり方」の人間にとって、「頽廢」は手段であり、彼らの関心は「人類を病気にすること」である。^{viii}

ⁱ Ibid., 22, S.188-189

ⁱⁱ Ibid., 22, S.189

ⁱⁱⁱ Ibid., 23, S.189-190

^{iv} Ibid., 23, S.190

^v Ibid., 23, S.190-191

^{vi} Ibid., 24, S.191

^{vii} Ibid., 24, S.191-192

^{viii} Ibid., 24, S.192-193